九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

東京大学所蔵『宗祇假名遣』について

崎村，弘文
鹿児島大学教養部講師

https://doi.org/10.15017/10500

出版情報：文獻探究. 11, pp.42-49, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

東京大学所蔵『宗祇假名遣』について

崎村弘文

東京大学文学部国語研究室所蔵の仮名遣い書『宗祇假名遣』について紹介するとともに、その、国語表記史資料としての価値を明らかにしたいと思う。

同書は、『国書総目録』に〈一冊 (類)語学 (写)東大・旧下郷〉(寛保三写)〉として登載されているもので、戦災で焼失したという下郷文庫の焼け残りである。筆者は、同研究室ならびに東京大学附属図書館の方々の御好意により同書の紙焼き写真を送って頂き、その内容を知ることができた。関係の各位に篤く御礼申し上げる次第である。

写真によれば、同書の書誌、次の通り。袋綴じ一冊(四針眼訂)。タテ二二・九cm×ヨコ一四・九cm。無地表紙の左肩に題簽(タテ一三・七cm×ヨコ三・二cm)、雲形に金銀砂子を散らし秋草を描いた地に「宗祇假名遣」と記す(その文字は本文と別の筆に成るもののようであるが、写真のみからは明確にしがたい)。表紙見返しは、やはり雲形に金銀砂子(上部中央に「東京帝國大學圖書印」一顆、その下と右に函架番号の印・ラベル、左下隅には「國語」の小印一顆)、裏表紙見返しも同様の装飾である。遊紙一丁の後に、墨付き三〇丁が有る。

本文は三部に分かれ、一丁表〜一二丁表が「宗祇かなつかひちかみちの事」、一三丁表〜二七丁表が「假名つかひ近道の抜書」、二八丁表〜二九丁裏が「宗祇假名つかひ口傳の奥祕」となっている(第二者の末尾・二七丁表左端には「宗祇かなつかひちかみち終」と有って、あたかも「――ちかみちの事」に応じた尾題の如くであり、前二者を分かつことに若干の問題が無くもない。しかし、第一者と第二者は、下述の如く、互いに同一書の異本に当る内容を持つものであり、本来一体を成していたものとは思われない。同書の成立を考える上からは、両者を分けて考えるのが適当と思われる)。全て一筆に成るものとおぼしく、近世中期以降の書写と見られるが、それを具体的に示す記載は無く、ただ巻末に「此一巻ハ宗祇假名つかひちかみちと云/極祕の口傳書なり池田玄察處士の/所傳也」という奥書きが有るのみである(「池田玄察」については未詳)。この点、『国書総目録』に〈寛保三写(一七四三年)〉と有るのは不審である。或るいは、別紙等にその旨記されているのかもしれないが、これも写真のみからは判断できない。後日を期したいと思う。

同書の内容を他の仮名遣い書のそれと比較してみると、次のようなことが明らかになる。

(1)「宗祇かなつかひちかみちの事」「假名つかひ近道の抜書」の二者はほぼ同じ内容を持つものであり、ともに、『丹抄かなづ

かい』および伝牡丹花肖柏著『假名遣近道之事』[注1]とごく近い関係に有る。

(2)ただし、「―ちかみちの事」は、首題に宗祇の名を冠するのみならず、巻末に宗祇自らの識語なるものを置いて宗祇の作たることを強調しており、他のものとは成立の伝を異にする。

(3)「宗祇假名つかひ口傳の奥秘」は、「い・ゐ・を・お・ふひへ・え・ゑ・ほ・は・わ(ゎ)・わ(わ)・う」の仮名遣いを、要点のみ、ごく簡略にまとめたもので、他に類例を見ないが、掲げられた項目のほとんどは「―ちかみちの事」「―抜書」に含まれるものである。

つまり、この『宗祇假名遣』なる一書は、カナヅカイチカミチもしくはそれに類する書名をもって流布した近世定家流仮名遣い書の二本と、その要義集らしきものとを集成し、それに宗祇の名を冠したもの、ということになる。宗祇作の真偽のほどは不明であるが、カナヅカイチカミチ類の諸書には、

①肖柏・三条西実隆など、連歌や古今伝受を通じて宗祇とつながりの深い人々を作者に擬するものが多く、

②内容的にも、特に『古今和歌集』物名歌を引いて芭蕉・龍胆・紫苑・牽牛子…等の表記を説くなど、古今伝受との関わりを思わせるところが有り、

宗祇との関係を全く考え得ないものでもないのである。とりあえず注目しておいてよい事と思う。

また、要義集については、全体の簡略さに加え、一部にヘを月を花を／をそしをそゆる〉の如き韻律句めいたものが認められることから、『假名遣近道略歌』等の暗誦歌[注2]と何らかの関連を持つのではと推測されるが、はっきりしたことは分からない。多くの資料によって検討すべき課題である。

中世以降における国語表記の実態は次第に解明されつつあるものの、それを支えていた原理・資料については、なお不明の点が少なくない。これを明らかにするには、先学の紹介された資料に整理を加えるとともに、新資料の発掘に精力的に取り組むことが必要であろう。小稿はそのような意味合いでまとめたものであるが、以後、同様の考察を積み重ねて行きたいと思っている。識者の御教示を請う。

なお、次頁以下に綱字を示す。御参照頂ければ幸いである。

【注】

1 『丹抄―』『―近道之事』については、木枝増一『假名遣研究史』(昭8)・島田勇雄「連歌師のかなづかい書」(「甲南大学文学会論集」32・昭40)・迫野虔徳『定家以後の仮名遣』(『今井源衛教授退官記念文学論叢』所収・昭57)等参照。なお、他にも異題同内容のものが有る。

2 注1に引く木枝氏の著書参照。同書には、他にも二・三の暗誦歌集が紹介されている。

宗祇かなつかひちかみちの事

一中のえを書事中をゆとよむハ中のえを書也

越こえ、消きえ、見みえ、煎もえ、絶たえ、凍こゆる、見みゆる、燃もゆる、肥こゆる、寒さえ、覺おぼえ、聞きこえ、燃もえ、肥こゆる、愈いえ

此類は何も中のえを可書

一ほををとよむかなの事

その字聲はねてよみたるハ皆ほををとよむなるへし

しほ　塩、いほり庵、かほ　顔、さほ　竿、かほる薫、にほふ匂、おほふ掩、うるほふ潤、あさかほ槿、こほり郡、ほのほ焔、こほり氷

如此聲をはねてよめる字ハ皆ほなるへし

一はしのをゝ書事　小の字の類は何もはしのを也

をふね小舟、をの　小野、を山田　小山田、をかハ小河、をしま小嶋、をくら山小倉山、をしか小鹿、をさゝ原小篠原、をミの袖小忌の袖、をくるま小車、つけのをくし小櫛、賤のをだまき小手巻、玉のをやなき小柳

此類皆はしのをなるへし

一おくのおを書事　大の字ハいつれもおくのおなるへし

おほ空、大、おほかた大、おほ院大、おほ海大、おほ江山大江山、おほはら山大原山、おほ井川大井川、おほいまうちきミ大臣

此類おくのおなり

一はしのへを書事　ふひへ此ミつにかよふハいつれもはしのへなるへし

おもふ、ねかふ願、むくふ酬、いふ、つかふ、まとふ惑、たくふ、たゝふ、はふ蔦の類、たかふ違、かたらふ、ちかふ誓、いはふ祝、たとふ、となふ、そふ、さそふ、あふ、かよふ、かなしふ、ともなふ、まよふ、うたふ、とふ、やすらふ、水かふ、うりかふ、くるしふ、なすらふ、うやまふ、とまふ、うかゝふ、むかふ、きしらふ、えふ醉、あらそふ、いさなふ、たくはふ、つかふ、したかふ、うつろふ、うらなふ、まふ、つくろふ、やしなふ、ならふ、おこなふ、さらふ、かこふ、くらふ物をしつらふ、ねらふ、くふ、のこふ、わきもふ、こたふ、くはふ、うれふ、あたふ、そのふ、さかふ、とゝのふ、たくはふ、なからふ、をとろふ、よこたふ、うへ草木、うふる、をしへ、をしふる、ふまへ、ふるまふ、ましへ、ましふる

此外にしるしおとしたるもあるへし

他准之如此はひふへほにかよふ

五音のゆへにはしのへを書事

此類なり忘れても此類によめぬかな

に中のえや又おくの函なとかくましき也

一中の井を書事下のひゞきあまたにかよハす一しなによむハ中のゐなるへし

くれな井、くれなゐともくれなへとも、雲井、たましゐ、くら井、つ井に、まと井、よ井、いい井、うゐかふり、し井紫、□れな井（一字欠損）、く井な、し井て、きゐる鶯、こ井とり

、人を待ゐて、に井枕、に井としいも井の場
此等の類なるへし
一うの字を下に書事下のひゝきあまたに
よめさるハうの字也
、そう僧　、ほうし法師、せうかう焼香
、ねうはう女房、どうだう同道、せう〳〵ウ々
、こうりう興隆、ぐうする　、れうし料紙
、まうけのれう儲料
此類に聲によむ字の下をうとよむ時は
大略ハうの字也くんによむ時は下をうと
よむ字ハふの字をうの聲によむなるへし
一むの字をうの聲によむ事口をむすひてよむ
字ハむの字をうのこゑによむなるへし
、むもれ木、むめ梅　、むまれ生
、むは玉の夜、むま馬　、むへ山風
、むへなるはなし
一物のをといふ緒の字ハいつれもはしのを
なるへし
、玉のを　、琴のを　、琵琶のを
、鐘のを　、甲のを　、念珠のを
、鷹のへを　、沓のを
此類何も物のをハ皆はしのをなり
尾の字ハいつれもおくのおなり

6オ

、鷹のおのは、山鳥のしたりお　虫の類
皆おくのおせ
一、をし、をさへてなといふハミなはしのをなるへし
一、をしなへて、をし明かた、舟をゝす
、をしはかる、をしよする
此類忘てもおくのおにてあるまし
一物の音ハ何もはしのをなり
、をとつれ　、鐘のをと　、かせの音
、をとハ川　、をとなし川、まりの沓をと
、物をうつをと、つゝミのをと
此等類忘てもおくのおにてハあるへからす
一はせをはせうとハかゝすはせをと
かなによつてなり　古今の右の哥に
はせをはとよめり
作者きのめのと
いさゝめに時まつまにそひはへぬる心
はせをハ人に見えつゝ
さゝ　まつ　ひは　はせを　此四つを
うち入てよめる哥也
一りうたんの花とかけり　りんたうとハかゝす
この故に友則か哥に　わかやとの花ふミ
ちらすとりうたん野ハなけれはやこゝにし
もくる

7オ　8オ

一けにごしとかけりけんこしとハかゝす此故に
うちつけにこしとや花の色をミん
をくしら露のそむるはかりを
一をみなへしとハはしのをなり女郎花と
かけりをんなとハはしのをなるへし
をミなへしたちいりたる哥に
しらつゆを玉にぬくとやさゝかにの
花にも葉にもいとをミなへし
一おとこはおくのおなり、をのこの時は
はしのをなるへし
一此近道之口傳の外にかれこれかけるかな
おほしかなにかきて字わろきもあれ
ははしのいやおくのひや中の井やなと
おもひの外にかけるもあり中のえハゆ
とゆくところをハえとかける故にし
るせるより外には中のえをかける
字はあるへからすとなりはしのへに
ふひへとかよハぬ外にはしのへをかける處
おほし
、しろたへ、たへかねてなと妙の字と堪の
字とはふひへにハかよハされともはし
のへをかけり、かへる厂(雁)なとかけるふひへ
とハゆかさる也されともかへるといふ字かな

9オ　10オ

に書時は中のえおくの名似あはぬあい
たはしのへをかへるとかけり
此類他にしゆんすへし
をのれをのつからをのをのかさまを
これハわすれてもおくのおにてハ有へからす
おほしめしおはしましなとハおくのおなる
へしおはしましなとはしのをゝ書人
ありあやまりにやおハしましとハ
御座とかけり何も御の字ハおくの
おなるへし
右之近道の事かたつ井中の
少童新發意やうの人あまりに
かなちかひきしとかへハそのことき
の人のためにしるての御事に作
徑に仰の處いなとも申得すミて（よろしくか？）
かくのことくに候他見以外の事
たるへく候也

宗祇作之

假名つかひ近道の抜書

一中の江を書事（ママ）をゆとよむハ中の江を
かくなり

10ウ

11オ

11ウ

12オ

12ウ

越こえ　消きえ　見みえ
聞きこえ　絶たえ　覺おほえ
崩もえ　燃もえ　肥こえ
喩（ママ）いえ

此類何も中の江をかくへし

一ほををとよむかなの事其の声は
ねてよみたるハミなほををとよむ成
へし
いほり庵（アン）　かほ顔（ガン）　にほふ薫　句
さほ竿（カン）　おほふ掩（エン）　しほ塩
いはほ巖　うるほふ潤　あさかほ槿
ほのほ焔　こほり郡　こほり氷

此類皆ほなるへし

一はしのをかく事小の字類何もはし（の）（スリ消し）
のをなり
をふね小船　を川　小川
を野　小野　をしま小嶋
をくら山小倉山　を山田小山田
をさゝ小篠　をミの袖小忌袖
をくるま小車　をくし小櫛
をたまき小手巻　玉のをやなぎ玉の小柳
をしか男鹿是も此をなるへし
此等皆はしのをなるへし

13オ

13ウ

14オ

一おくのおかく事大の字ハ何もおくのお也
おほ空大空　おほかた大方
おほ淀大淀　おほ江山大江山
おほほら山大原山　おほ海大海
おほ井川大井川　おほいまうちきミ大臣

此類おくのおなり

一はしのへをかく事ふひへ三にかよふをハ
何もはしのへなるへし
思ふへ　ねかふひへ
物をつかふへひ　いふひへ　まとふへひ
薗田殿にて或人の發句に
雪にけさ春たくひなし峯の松
あらふへひ　はらふへひ　ちかふへひ
たかふへひ　たゝふへひ　かたらふへひ
になふへひ　いはふへひ　たとふへひ
となふへひ　そふへひ　さそふへひ
あふへひ　かなふへひ　とふへひ
ともなふへひ　まよふへひ　うたかふへひ
水かふへひ　やすらふへひ　うかかふへひ
なすらふへひ　うやまふへひ　すくふへひ
ひろふへひ　あらそふへひ　したかふへひ
うかふへひ　むかふへひ　きらふへひ
よふへひ　あちハふへひ　はふへひ

14ウ

15オ

15ウ

16オ

いさなふへひ　たくわふへひ　つこふへひ
うつろふへひ　かけろふへひ　うらなふへひ
まふへひ　をこなふへひ　やしなふへひ
ならふへひ　いとふへひ　きらふへひ
かこふへひ　つくろふへひ　くふへひ
物をしつろふへひ　ねかふへひ　もらふへひ
かんかふへひ

此外にふひへの中のひの字を
のそきたるもあり
わきまふへ　こたふへ　くわふへ
うれふへ　あたふへ　そなふへ
とゝのふへ　さかふへ　たゝかふへ
ながらふへ　おとろふへ　うかかふへ
をしへまかふるへ　をしふるへ　ふまへ
ふるまへ　ましへ

此外にしるしおとしたるもあるへし
他准之如此はひふへほにかよふ五音の
ゆへにはしのへ書事此類なり
忘ても此類によめむかなに中のえ（ママ）
一中のゐをかく事下のひゝきあまたに
かよわすたゝひとしなによむハおくのゐ
成へし
くれなゐ　くれなふとも　くれなへとも

17ウ　17オ　16ウ

よまさるによつて中の井をかく成へし
いゐ　しゐ柴　うゐかふり
つゐに　まとゐ圓居　よゐ宵
くゐな鳥　しゐて　きゐる鶯
こゐとる鷹　待ゐて　にゐまくら新枕
にゐとし新年
一おくの ゑを下にかく事
こゑ　すゑ　にゑ
うゑもん　さゑもん　うひやうゑ
さひやうゑ　さへもんにてハあるへからすおくの
ゑをかく事あまた有ましき成へし
一はしのいを下に書事こゑあまたによま
さるゆへにはしのいをかく成へし
おいのねさめ
そ木の生てといふハおひてとひの字
をかくなり
草木のおひておふるなといふゆへふひ
へのかよひによりて生の字の時ハおゐて
なり
ひたい額　らいはい礼拝　たいない胎内
れい礼　此類はしのいを下に書也
大略こゑによむ字の下をよめるハはし
のいなるへしくんによむ字の時ハ下を

18オ　18ウ　19ウ

いとよむをひの字をかくあまたあり
うくひすと（原文「ゐと」）ハくんのよみ也
声ハあふの声也　うくひすとか（原文「ゐと」）ゝんハ
かなの字かきたる所也わろきによりて
うくひすとかき（原文「ゐと」）つゝけてよろしきと
なり
古今の哥に
心から花の雫にそほちつゝ
うくひすとの（原文「ゐと」）ミ鳥の啼らん
此類多くあるへし
一うの字を下に書事下のひゝきあまた
によまさるハうの字なり
そう僧　ほうし法師　せうかう焼香
ねうはう女房　とうだう同道　せう〳〵少々
たうたう堂塔　こうりう興隆　くうする　まう
けのれう儲料　れうし料紙
此類も声によむ字の下をうとよむハ
大略うの字なるへし　くんによむ時ハ
下をうとよむ字ハふの字をうの声
によむもあるへし
一むの字をうとよむハ口をむすひて
よむ字ハむの字をうの声に讀なるへし
むもれ木　むめ　むまれきて

20ウ　20オ　19ウ

、右近のむまは、むへ山風　、むは玉の夜
、せうとむは
　此類成へし
一物の緒といふをの字ハ何れもはしの
を成へし
、玉のを玉の緒、びわのを、鐘のを
、甲のを　、念珠のを、けさのを
、くし箱のを、鷹のへを、沓のを
　此類いつれも物のをハはしのをせ
一尾の字ハ何もおくのお成へし
、おのへ　、鷹のおのは
、山とりのおのしたりお、馬のおかミ
鳥獣虫生類の尾ハ皆おくのお成へし
一をしをさへてなといふ類ハ皆はしのを
成へし
、をしなへて　　、をし明かた
、舟をゝす　　、をしはかる
、大せいをしよする
　此類忘てもおくのおにてあるへからす
一物のをとハ何もはしのをなり
、をとつれ、鐘のをと、風のをと
、をとは川、をとなし川、まりの沓をと
　此類音といふ字忘てもおくのお

21オ

21ウ

にてあるへからす
一はせをは　はせうとハかゝす
はせをとかなにかくにより て古今の
物の名の哥にはせをはとよめり
、哥に
　いさゝめに時待まにそ日ハへぬれ
　心はせをは人に見へつゝ
作者きのめのとの此哥ハさゝ　松　ひは
はせを　此四つをたち入てよミたる
哥なり
しをにの花とかけり
しをゝんとハかゝす
此故に哥に
　ふりはへていさ古郷の花見んと
　こしをにほひにうつろひにけり
一りうたんの花とかけり
りうたうとハかゝす
此故に哥に
　我宿の花ふミちらすとりうたん
　のはなけれはや爰にしもくる
作者友則
一けにこしとかけり
けんこしとハかゝす

22オ

22ウ

23オ

23ウ

此故哥に
　うちつけにこしとや花の色を見ん
　をく白露のそむるはかりを
此哥作者やたへのと有をミなへ
しとハはしのをせ女郎花とかけり
をんなとハはしのを成へしをミなへし
をたち入たる哥に
　白露を玉にぬくとやさゝかにの
　花にも葉にもいとをミなへし
、をんなハはしのをせ
、おとこハおくのおなり
、をのこの時ハはしのをせ
此近道の口傳の外にかれこれかける
かなおほし假名に書候字又
わろきもあれハはしのいや　おくのひや
中のゐやなと思ひの外にかけるも
あり中のえハ内えと行所を以てかける
故にせるしるより外に中のえをかける
字あるへからすはしのへハふひへに
かよハぬ外にはしのへをかける字おほ
ししろたへたへかねてなと妙の字と
堪の字とハふひへにかよハされとも
はしのへをかけるかへる鳥なとかけ

24オ

24ウ

25オ

25ウ

るふひへとハゆかさる字せされとも
歸ると云字かなに書時に中のえ
おくの函似合さる間はしのへを
かへるとかけり
此類他准之也
一をれをのつからをのかさま
をの〳〵是ハ忘てもおくのおにて
有ましき也
一おほしめしおハしましなとハおくの
お成へしおハしましなとハはしの
をかく人もありあやまりにやおハし
ますとハ御座あるとかくなり何も
御の字ハおくのお成へし

宗祇かなつかひちかみち 終

宗祇假名つかひ口傳の奥秘

一い（上）古 糸 ない うれしい

一ゐ（下ノゐ） 井 居 終（つゐ） 初（うゐ）

26オ

一を（上下ニ用）小 音 織 を月を花を をそしをしゆる

一お（上斗）大 乙 折 奥

26ウ

一ふ仏へ（おもふ〜ヲ おもへひふ〜ヲ） へヲエトヨム時 はしのへ

一江（中のえ）（ヱ〜（取りあえず原文の字体のまま示す）） 見（え） 見ゆる 聞（え） 聞ゆる さえ さゆる

一函 声 笛 一字ノ時用

一ほヲヲトヨム時 顔塩賬（かほしほにきほふ）

一はーハ 初て 端 是ハ上中下ニ用

一わ（原文「ワヒ」）（「ヒ」同上）いわ井ノ時斗中ニ用 其外ハ皆上斗ニ用

27オ

一わ（原文「ワヒ」） 渡（ワヲ） 別 上斗

一う 僧（そうヲ） 法師（ほうヲ）

ウヲヲトヨムトキハ（ママ）

27ウ

此一巻ハ宗祇假名つかひちかみちと云
極秘の口傳書なり池田玄察處士の
所傳也

28オ

28ウ

29オ

29ウ

30オ

（合点・項目点は、全て朱点のようである。）

——鹿児島大学教養部講師——